

# 医療タイムス

週刊医療界レポート

2011.8/15・22 No.2024

NEWS

## 女子7人制ラグビーチームの創設を発表

医療法人柏堤会

山田中央医科グループ(TMG)に所属する医療法人柏堤会は2日、記者会見を開き、病院職員で構成する女子7人制(セブンズ)ラグビーチーム「TKM7(「塚共立メディカルセブンズラグビークラブ)」の創設を発表した。

チームオーナーとなる柏堤会の横川秀男理事長は、自らが高校・大学とラグビー部に所属し、1992年から5年間昭和大学ラグビー部監督を歴任してきたことを述べ、ラグビーへの思いを披露。「病院内は医師、看護師をはじめ国家資格取得者が多い職場。だからこそラグビーの『One for all, All for one』の精神で今日までやってきた」と語り、「夢のあるセブンズラグビーチームの結成は、社会貢献にもつながり、法人内のモチベーションアップとなる」と意欲を見

せた。

チームのゼネラルマネージャー兼監督に就任した上田昭夫氏(元日本代表、元慶應義塾大学監督)は、「日本ラグビー協会とも連携し、女子セブンズの強化拠点としていきたい」と抱負を述べた。

医療法人所属の女子セブンズラグビーチームは国内初となるが、サッカーJリーグに所属する横浜FCなどとサポート契約を締結。練習環境・指導環境を整えるとともに、メディカルサポートも充実した。選手は職員として採用し、引退後の医療人としてのセカンドキャリアを視野に入れている。女子のセブンズラグビーは、2016年開催のリオデジャネイロ五輪で正式種目として採用され、日本においても強化、普及が喫緊の課題となっている。

# 戸

田中央医科グループ（TMG）の一翼を担う医療法人柏堤会が、病院職員で構成する女子7人制ラグビーチーム「TKM7（戸塚共立メディカルセブンズラグビークラブ）」の創設を発表した。オーナーとなる理事長の横川秀男氏が、高校・大学とラグビーを親しみ、かつ1990年代には昭和大学ラグビー部監督だったというのも驚きであったが、慶應義塾大学監督として2度の日本一を手にした上田昭夫氏がゼネラルマネジャー兼監督に就任したことも驚いた。TMGの中には、すでに戸田中央総合病院にソフトボール部と漕艇部があり日本代表クラスの選手を輩出している。まさかグループ内で対抗してということではないだろうが、内部で蓄積されたノウハウを基に、今後ラグビーチームも運営されていく。

企業とスポーツの在り方は、常に論議的だ。スポーツジャーナリストの二宮清純氏は、スポーツの球団について「あくまでも地域の財産であり、一企業の所有物ではない」と語ったことがあった。それはオーナー陣が、選手・ファンの意向も聞かないで、一方的に球団を潰し、1リーグ制への意向を画策し、ついには選手会が史上初めてストライキを敢行したプロ野球に対しての発言だった。

同じ女子スポーツには、ついには国民栄誉賞まで受賞し、まさにブームの絶頂にある女子サッカー、いわゆるなでしこジャパンが挙げられるだろう。しかし輝かしい栄誉とはう

FOCUS

## 医療法人によるスポーツ支援 元気の素の提供も役割の1つか

げられるだろう。しかし輝かしい栄誉とはうらららに、実際は今もって多く選手が、仕事やバイトをしながらの日本代表の活動となっている。合宿や遠征などで長期間にわたり休暇をとらざるを得なく、転々とバイトを替えるなでしこOBもいた。そこにも実は、企業スポーツの弊害が見え隠れする。1リーグとして女子サッカーも一時盛り上がりを見せた。しかしシドニー五輪予選敗退で一気に人氣が低下し、親会社は次々と廃部を決めた。選手はまさに自活をしながらサッカーを続けることになった。その延長が、今にある。

柏堤会のセブンズラグビーは、16年開催のリオ五輪に向けて、ラグビー協会と連携し、代表強化の拠点として活動する。金銭的な援助は受けられないものの地元企業のサポートも得た。単に興味や宣伝の域を超え、ラグビー振興の熱意が汲みとれたことは幸いだ。

医療法人のスポーツ支援では、スピードスケートの小平奈緒選手が所属する長野県の相澤病院がある。身分は病院職員だが、長期の遠征もOK。なによりも充実したメディカルサポートは選手にとればうれしいことだろう。

実は「震災の傷も癒えないのに医療機関がラグビー？」との声があることも確か。だがこんなときだからこそ、元気がでるスポーツは必要だ。それはなでしこジャパンの活躍で証明された。そして元気の素を提供していくことも医療法人の1つの役割かもしれない。

焦点